

## 農環研ニュース No.27

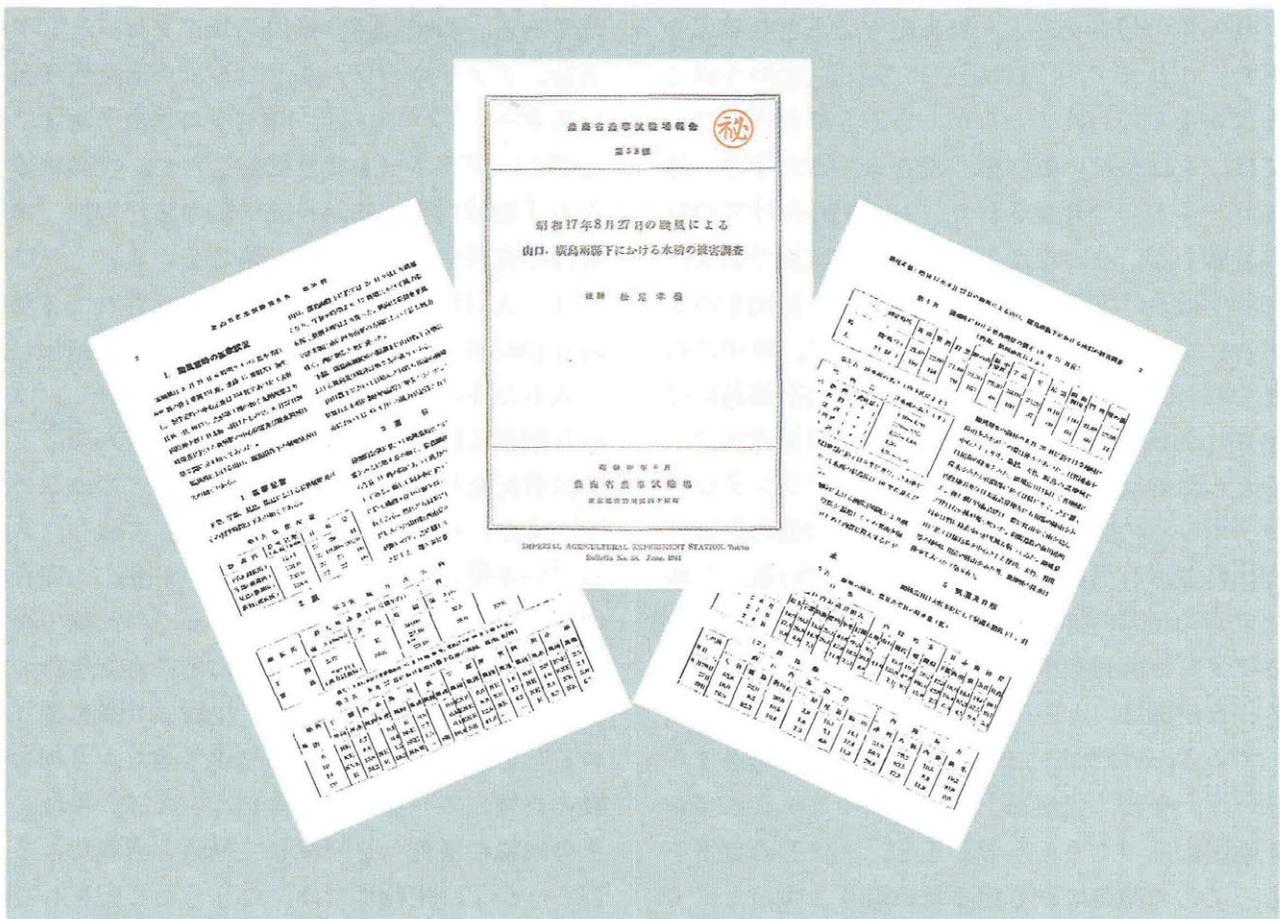
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24514/00008054">https://doi.org/10.24514/00008054</a>

# 農環研ニユース

1995.3

No. 27

農林水産省 農業環境技術研究所



## 戦時下、マル秘扱いとなった「試験場報告」

わが国では、1941年12月8日から45年8月23日まで、約3年8ヶ月にわたって、全く天気予報のない日常生活を送った。この間、「理科年表」によれば6つの大きな気象災害に見舞われているが、42年8月27日、西日本各地を襲った台風は、沿岸部で高潮をともなうなど、多大な損害を与えたものの報道されなかった。

# 新春随想

## ～21世紀を想う～

所長 玉木佳男



1995年の新春を迎え、21世紀まであと5年となった。これまで、「21世紀をめざして」という枕ことばがよく使われていたが、あと5年だけとなつては、もはや使い難い感じである。1992年の「地球サミット」で合意された「21世紀に向けての行動計画」も、なかなか進まないのが実情である。2000年における二酸化炭素の排出量を1990年のレベルに抑えるという国際目標について、昨年の秋までにジュネーブの気候変動枠組条約事務局に提出された15カ国の報告によると、目標を達成できるとしたのはチェコ、デンマーク、オランダなどヨーロッパの数カ国にすぎない。その他の先進諸国は軒並み目標達成ができないとしている。二酸化炭素の世界の排出量の2割を出していると言われるアメリカも目標値の3%オーバーを予測している。わが国は、というと世界の排出量の4%を出しているわけだが、これも目標値を2.3%超過するという。今後、発展途上国でのライフスタイルが先進国に近づくことを考えると、よほどの覚悟をもってこの問題に取り組まない限り人類にとっての21世紀は闇の中となりそうである。

人口増加についての国連の将来予測では、21世紀半ばの人の数が100億に達するとされている。これは現在の人口56億の2倍に近い数字である。しかも、これが中程度の増加率で予測されたもので

あり、大方の予想ではこれよりも高い増加率の可能性が大きいとされている。昨年の国連人口開発会議には期待がもたれたが、会議のなりゆきは人口抑制についての国際的なコンセンサスを得ることの難しさを浮彫りにした。今や爆発しつつあるこの人口を養うための食料の確保が、環境を損なうことなしに成し得るかどうか問われているわけである。環境関連分野のシンクタンクとして有名な、アメリカのワールドウォッチ研究所所長のレスター・ブラウンは、昨年度の旭硝子財団によるブループラネット賞を受賞したが、彼の執筆になる「地球白書」1994-95年版の第10章は「地球規模の食料危機」について論じている。それによれば、人口増加と並行して増産がなされてきた食料も1984年を転換点としてその上昇率が鈍化し、一人あたりの生産量は減少に転じたという。こうした問題に回答を用意しないかぎり、人類にとって21世紀を生き抜くことは容易なことではない。ところが、それへの行動は遅々としており、わかっているけど進まない、というのが今の人間社会の問題点である。地球に生きる多くの動物のなかで、人間だけが遙か昔に二本の足で直立歩行のわざを身につけ、これによって生物界で最も優れているといわれる大脳機能を発達させた。万物の霊長と自賛しているホモ・サピエンスは、果たしてその頭脳の優秀さを発揮して絶滅を回避できるのだろうか？。生物学者は、こうした心配をしなくてはならなくなりつつある。ホモ・サピエンスのなかでも研究者や科学者は、とくに優秀(?)ともいわれる大脳機能をもっているはずであるから、人類の未来はこうした人たちへ託されているのだろう。その責任は重大である。

「開発」ということばも最近では「持続的な」という枕ことばをつけながら使われることが多い。しかし、経済発展が第一とされる社会の中では、この枕ことばが「開発」の免罪符のような匂いがする。そして、ときどきお目にかかる気になるときに、「農業社会から工業社会への発展」というのがある。本当に発展なのだろうか。わが国は、こうした歴史をたどってきたとされているが、現在では東アジアを中心とした国々がまさにわが国のたどった道をトレースしつつある。しかし、21世紀にはこうした考え方が支持されなくなるだろう。地球とよく似た惑星がいくつもあり、簡単に移住できることにでもなれば別であるが、少なくともこの地球では農業社会の重要性の再認識が、今後大いに進むものと期待したい。食料を確保しつつ環境を保全するという新しい農業・農村社会のあり方が、改めて見直されることとなるだろう。ただし、わが国ではこうした方向がどれほど加速されるかについては、あまり楽観できない。これは農地の利用をめぐる経済界のトップの人たちの発言からもうかがえることである。ヨーロッパを中心とした諸外国の進歩を後から追いかけ、しかも外圧によって少しずつ変えていくという例のパターンが、まだしばらくは続きそうである。

問題の多くは政治と行政施策の如何にその解決が依存しているが、難しい問題ほど研究や技術開発への期待が大きい。21世紀最大の問題となると考えられる食料・環境問題などは、まさにこれに相当するものであろう。この問題の解決の難しさは、生産性向上と環境保全という一見ジレンマのような問題を同時に解決しようというところにある。近代科学の歴史は問題をブレークダウンし、これを構成する要素ごとに研究を細分化・深化する方向で進んできた。生命現象の研究がDNA分子のレベルでなされているというのは、その典型である。しかし、食料・環境問題はこうした細分化型の研究だけではどうにもならない。細分化した専門領域で生まれた膨大な知識を有機的につなげて全体を再構築し、つねに全体を把握しながら

を進めることが必要である。特に環境問題の解決には一点突破型の技術だけではなくて、多様な問題の相互にバランスのとれた進展、つまり全面同時対応型の技術が必要である。異なる学問分野の統合によって、初めて意味ある展開が期待されるであろう、こうした問題への取り組み方を明確にすることも、これからの大切な課題である。複数の既存学問分野を統合したらあらたな概念の研究領域についての人材育成から始めつつ、これまでの「寄り合い相談型」のシステムを高度に洗練された形に進化させる必要があるということだろうか。

国際社会の中では経済大国としての地位を築いたわが国だが、お金以外の面ではあまり諸外国から頼りにされていない。頼りとなるお金も、産業の空洞化、製品開発の頭打ち、東アジア諸国の追い上げなどで21世紀のなりゆきが危ぶまれている。資源小国の日本では科学技術しか頼るところがないはずであるが、最近の科学技術白書によると研究者一人当たりの研究費は先進国の中で最低であるという。そのわりには、わが国の研究者は世界を相手にがんばっているといわざるを得ない。民間研究分野では、最近の経済情勢から、基礎研究を大幅に縮減し、当面の製品開発に重点を移さざるを得ないなかで、国の研究機関は当面の問題の解決にだけ目を奪われることなく、基本的な問題の解決に向けて長期的に取り組む姿勢をはっきりとさせる必要がある。特に、21世紀最大の問題となる食料・環境問題の解決の必要性と、そのための農林水産研究の意義と重要性を社会に向けて提言し理解を得るための努力をするべきであろう。



## 21世紀の食料需給と環境問題

21世紀はどのような時代であろうか。農水省の人間としては我が国の食料需給が特に気になる。また、21世紀の食料生産は環境にどんな影響を与えるのであろうか。むろん神ならぬ身、正確に未来を予言することなど不可能である。しかし、物質収支を考えれば、これから起こることの範囲をある程度予測することは可能であろう。ここでは21世紀の食料需給を規定する2つの重要なトレンドについて述べる。

図1には1960年の値に比べてときの人口と耕地面積の変遷を示す。人口の急速な増加に比べ、耕地面積は殆ど増えていない。耕地は有史以来森林を伐採して得た。森林の保護に対する国際世論の高まりを考えれば、今後耕地が飛躍的に増加するとは考えられない。一人を支えるための耕地面積は今後も減少してゆくであろう。限られた耕地より多くの収穫を上げるには、多くの肥料を与えなければならない。

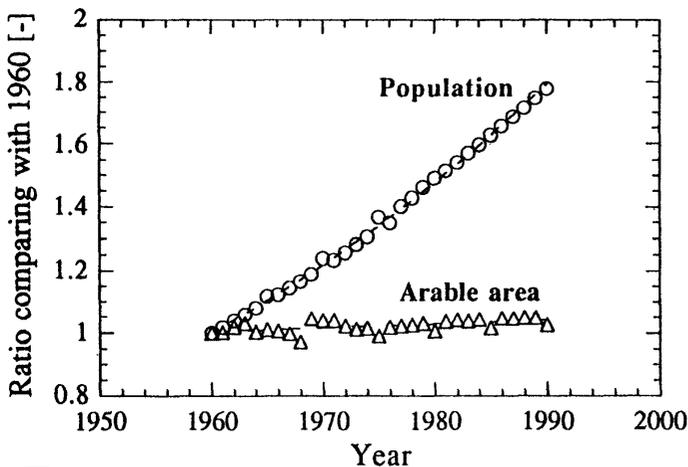


図1 世界の人口と耕地面積の変遷 (FAOデータより作成)

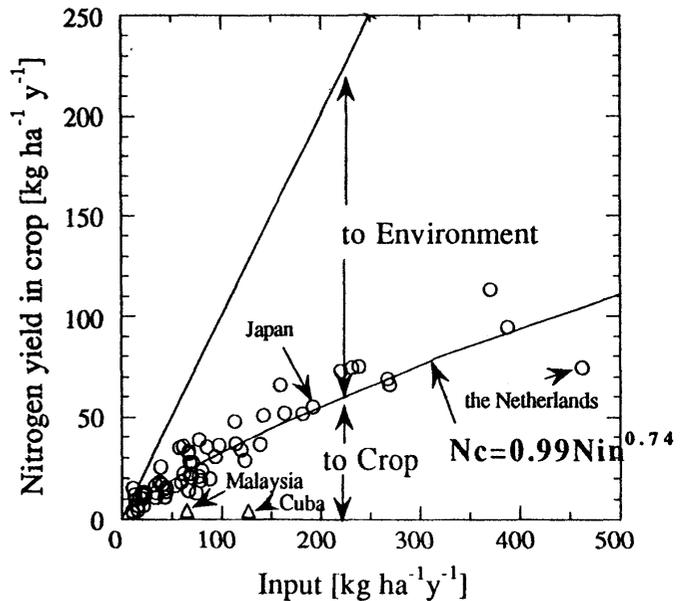


図2 窒素投入量と収穫物中の窒素量の関係 (人口1000万人以上の国, 1990)

図2は窒素の投入量と収量の関係を国別に見たものである。世界を見渡せば窒素肥料を十分に与えていない国々は未だ多い。窒素肥料の投入により収穫を増加する可能性はまだ十分にありそうだ。気になるのは、収穫物に移行する窒素量が、投入量が増えるに連れ漸減することである。作物に吸収されない部分はいずれにせよ環境に放出される。

21世紀の食料需給を規定するもう一つの条件として、肉食の増加が上げられよう。図3は一人あたりのGNPと蛋白の消費量の相関を国別にプロットしたものである。一人あたりのGNPが増大するにつれ蛋白質の摂取量が増え、特に動物性蛋白質の摂取量が増える様子が解る。古来より動物

性の蛋白質は狩猟や漁労により得てきたが、現在は多くの部分を家畜より得ている。人類が摂取する蛋白をこれ以上狩猟や漁労に託せないことは明らかだ。家畜により蛋白質を得るためには、得られる動物性蛋白質の約5倍の植物性蛋白質が必要である。より多くの穀物が必要になる。

この二つのトレンドにより21世紀の食料需給についてどんなことが考えられるか。まず、限られた耕地より、より多い収穫を上げるために、世界中で窒素肥料が多用される。窒素肥料生産は工業化において初歩的な技術だ。途上国ではまず窒素肥料を作る。現在、わが国やヨーロッパで問題になっている地下水の硝酸汚染、閉鎖性水域の富栄養化問題は、今後、世界中で問題になろう。この問題の解決には施肥効率の向上が有効であろうが、先進国においても容易に解決できない問題が、生産性向上を第一とする開発途上国で今後簡単に解決されるだろうか。悲観的にならざるを得ない。

また、来世紀中に100億人にも増える人口を、地球は賄いきれるのであろうか。これについての答えはYESでありNOである。全世界の人々に先進国の食生活水準を約束することは、物質収支より計算して不可能である。しかし、植物性蛋白の摂取を主とした食生活は、施肥量の増加により可能である。これは、人口が100億人程度まで増加出来ることを示す。食料需給がタイトになるかどうか

は、全人類のうち何人が肉を食べるかにより決まる。このことは、経済がどのように発展するかを予測することに他ならない。我が国の食料需給を考える上では、成長著しい東アジア、特に中国との関係をどうするかが最も重要であろう。これは我が国にとってはなかなかやっかいな問題である。

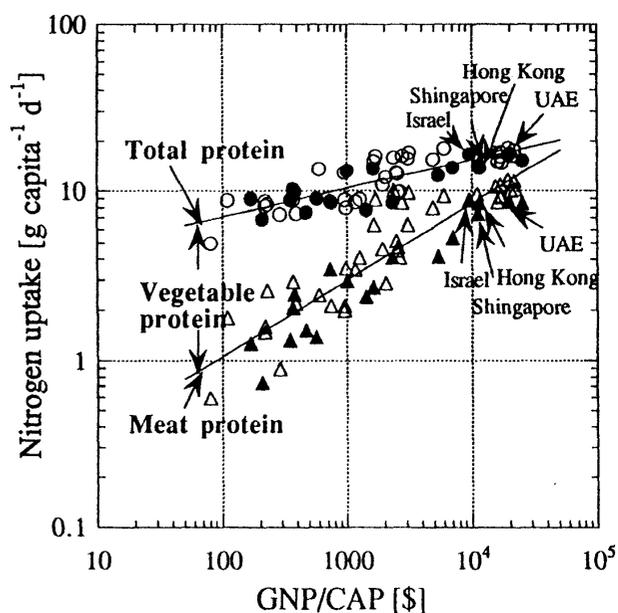


図3 一人当たりのGNPと蛋白摂取量(窒素換算)の関係(1990)

(水質動態研究室 川島博之)

## 海外出張メモ

# オーストラリア観測事情

宮田 明 (気象特性研究室)

1994年10月後半、オーストラリアNew South Wales州南部で、OASIS Experimentと称する温室気体のフラックスに関する総合観測が実施されました。「地球科学技術特定調査研究にかかわる海外派遣」として、この総合観測の現場を訪れる機

会がありましたので、観測の概要を印象を交えながら紹介します。

OASIS Experimentは、陸上生態系起源の温室効果気体(CO<sub>2</sub>, N<sub>2</sub>OおよびCH<sub>4</sub>)のフラックス

を、相互に関連する3つの異なる水平スケール(チャンバースケール, 0.3m<sup>2</sup>; パッチスケール, 10ha; リージョナルスケール, 100~1000km<sup>2</sup>)で測定し, これらのガスの発生, 吸収および輸送過程を明らかにすることを目的としています。OASISとはObservations At Several Interacting Scalesの略称です。ガスフラックスの測定というと, 地面にチャンバーをかぶせた様を思い浮かべる方が多いと思いますが, 実際には水平スケールに応じたさまざまな測定方法があります。この総合観測では, それぞれのスケールでのフラックスの測定とともに, フラックスのスケールアップの手法の開発, とくに, さまざまな生態系が混在する陸域においてリージョナルスケールのフラックスをいかに評価するか, に重点が置かれているように感じました。

OASIS Experimentはキャンベラの西約200kmに位置するWagga Wagga市の周辺で実施されました。CSIROの諸機関や大学から約40名の研究者が参加し, 東西約100kmに分布する3つの地点で地上観測が行われ, また全域を対象とする航空機観測も実施されました。Wagga Wagga地域はNew South Wales州の代表的農業地帯で, 麦類の栽培と牧畜, そしてブドウの栽培が中心です。余談ですが, 「Wagga」はアボリジニの言葉でカラスを意味し, 同一語の繰り返しは複数形を表すことから, 「Wagga Wagga」とはカラスのたくさん集まる所, というような意味だそうです。年降水量は約

600mmですが, 1994年はオーストラリア東部では少雨傾向が著しく, この地域でも観測前の3ヶ月間はほとんど降雨がなく, コムギなどに干ばつの被害が出ている状況でした。このため, 観測データの一般性について心配する声も聞かれました。

私は地上観測点のなかではもっとも集中的に観測が行われたCharles Sturt大学に滞在しました。この大学での観測は, 構内の農場の1区画(放牧草地およびオートムギ畑, 面積約40ha)を使って行われました。この総合観測のために立てられた高さ22mのマストに渦相関法や傾度法によるガスフラックス測定のための測器が配置され(写真1), マストの周辺にはクローズドチャンバーやウエイングライシメータ, 空を見上げれば係留気球が浮かび, ときおりセスナやグライダーが飛来する, というように, にぎやかな観測風景でした。現地には「キャラバン」と呼ばれる床面積10m<sup>2</sup>程度の牽引式車両が数台搬入され(写真2), ガス分析計, 記録計, データ処理用のコンピュータなどはすべてこの中に収納され, 多くのデータはオンラインで処理されていました。キャラバンは研究所や大学の実験室をそのまま移動してきたようなもので, とても快適です。日本での私の観測といえば, 狭い自動車に機材を積み込むのに一苦労し, 現地に着いてからは小型の物置を前にして, ああでもない, こうでもないという収納方法に頭を悩ましながら測器をセットアップしたのもつかの間, 配管や配線に異常でも発生しようものなら, いった

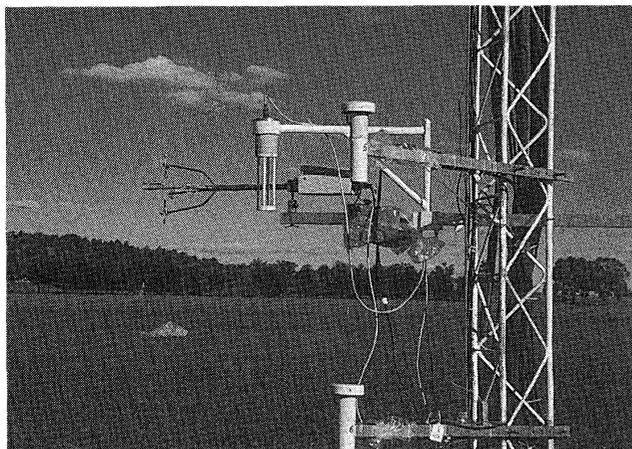


写真1

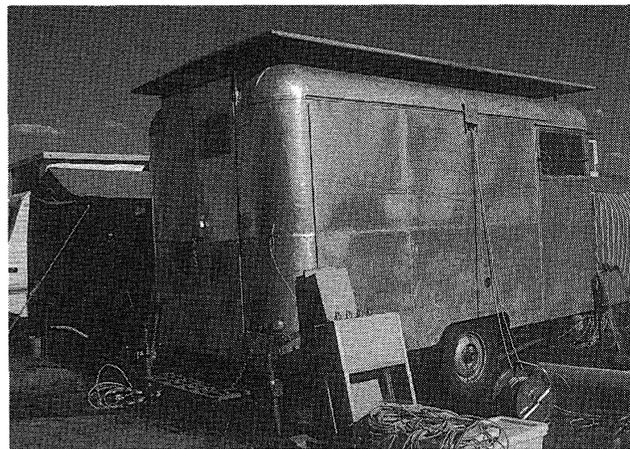


写真2

ん測器を全部外に出す羽目に陥る，というような状況ですから，雲泥の差といえます。

OASIS Experimentのなかで特徴的な観測をひとつあげるとすれば，CSIRO Center for Environmental Mechanics (CSIRO/CEM) のグループが行っていた，混合層マスバランスモデルに基づくリージョナルスケールでのガスフラックスの観測です。この観測は昼間，地面近くに形成される鉛直混合が活発な層（混合層）を全体が均一に混合されたチャンバーとみなし，層内のガス濃度の時間変化，および混合層とその上の自由大気とのガス交換量（エントレインメント）を測定することによって，100～1000km<sup>2</sup>規模での平均的な地表面のガスフラックスを評価しようというものです。混合層内の代表的な高度での濃度変化は，空気吸引用のチューブを取り付けた係留気球を高さ約100mに浮遊させ，上空の空気をポンプで地上のガス分析計に送って測定していました。またエントレインメントは，混合層内とその上の自由大気中とのガス濃度の差，および混合層の上端高度の時間変化から評価するのだそうです。

大気境界層のマスバランスから広域的なフラックスを評価する方法は，これまで夜間に形成される安定層について試みられてきました。これと比較すると，彼らの方法は昼間に適用でき，対象とするスケールが10～1000倍であり，そして何といっても層内のガス濃度の測定高度が1つですむ，という長所があります。この方法で評価したCO<sub>2</sub>フラックスを，航空機からの渦相関法による測定結果と比較することによってモデルの有効性を検証し，N<sub>2</sub>Oやメタンについてもこのモデルを適用したいという話でした。

その他にも，TDL (Tunable Diode Laser) を用いた渦相関法によるメタンフラックスの測定や，水蒸気の酸素同位体比の鉛直分布の測定など，いろいろと興味深い観測が行われていましたが，もうひとつ，Wollongong大学のグループによるFTIR (Fourier Transform Infrared Spectrometer) を用いたガス濃度の高度分布の測定 (写真3) について紹介します。彼らは地上か

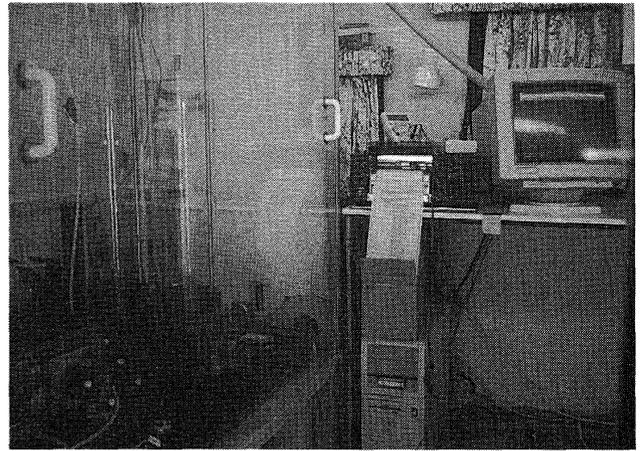


写真3

ら高さ22mまでの7つの高度から吸引した空気を順次分析し，水蒸気，CO<sub>2</sub>，N<sub>2</sub>O，CH<sub>4</sub>およびCOの高度分布を15分間で同時に得ていました。使用していたFTIRの波数分解能は1 cm<sup>-1</sup>でそれほど高くはないのですが，濃度の定量方法を工夫することにより，これらの微量ガスの高さによる濃度差を検出可能な精度を得ているという話でした。実際，メタンの観測結果をみると，周辺に放牧されている牛や羊という発生源の影響と，草地土壌による吸収という，2つの要因の介在を示唆する高度分布が得られていました。

観測期間中は，毎夕7時から宿泊しているホテルの会議室で，ビールを片手にミーティングが行われました。このミーティングでは毎回2～3グループが観測経過を報告し，それに関する討議が行われ，最後に明日の天気予報が紹介されていました。また，ミーティングの前後にも各グループが観測結果を持ち寄って，意見交換を行っていました。多くのグループが，夕方までに当日の観測結果をプリントアウトしていることには驚かされました。他グループの観測の進行状況を考慮に入れながら，自らの観測の内容やスケジュールを柔軟に変更するには，このようなミーティングが有効だと感じました。

また，彼らが特別の予算枠があるわけではなく，それぞれの研究予算を持ち寄って，この規模の総合観測を組織できることに感心しました。日本でもこのような総合観測を実施できる素地はあると

思うのですが、ともすると個別の観測で満足しがちではないでしょうか。制御できない条件が数多く存在する野外観測の場合は、同じ場所で同じ時期に観測を実施することが本質的に重要で、そのメリットは大きいと思います。

OASIS Experimentの終了後、この総合観測で中心的な役割を果たしているCSIRO/CEMを訪れる機会がありました。CSIRO/CEMは研究員数20名程度の小さな研究所で、オーストラリアの環境の維持管理と持続的使用を目的として、生物圏の物理過程に関する研究を実施しています。「ロ」の字型3階建てのこぢんまりとした建物の中央部には観葉植物が植えられ、屋根からは日光が取り入れられ、全体的に明るく落ち着いた雰囲気でした。各研究員の個室は奥行4 m、幅2 mほどで、ドアから奥の窓際まで達する細長い机と書棚、背面に黒板というシンプルな作りでした。また、3階の中央部には談話スペースが設けられており、全体

として、個室という研究員が思考に集中できる空間を確保しながら、研究員同士の意見交換を促す雰囲気も共存させようという努力を感じました。風洞を除けばこれといった施設はありませんが、工作室だけは特別でした。2名の常勤の技術者と充実した工作機械が配備され、今回の観測に使われた超音波風速温度計の原型やTDR (Time-Domain Reflectometry) のプローブもこの工作室で制作されたという話で、わが国の研究機関の現状と比べてうらやましいかぎりでした。そして、工作室のような施設にこそ予算をつぎ込むことが研究所としての見識の高さではないか、とも感じました。

以上、雑駁な報告になりましたが、オーストラリアの観測現場の雰囲気を感じていただけたでしょうか。私としては、OASIS Experimentの現場に滞在してオーストラリアにおける温室効果気体のフラックスの観測の現状を知ることができ、とても有意義な出張でした。

## 研究交流つうしん

# 唸り多きつくば漫遊記

長野県野菜花き試験場 斉藤 龍司

テニスサークルの皆さん、楽しい時間を有り難う。卓球サークルの皆さん、練習してくれて有り難う。ダンスサークルの皆さん、素敵な時間を有り難う。そして多量要素動態研究室の方々、肥料動態科の方々、短い間でしたが、研究について、またその他、多岐に渡りいろいろ教えていただき有り難うございました。

さて、私が、農業環境技術研究所 資材動態部 肥料動態科 多量要素動態研究室(樋口太重室長)にお世話になり始めたのは、初秋の10月3日でした。時間のたつのは、早いものです。この原稿を書いている今は、銀杏の葉もすっかり落ち、私の研修も2週間を残すのみとなりました。

ところで私の研修課題は、「硫酸集積土壌のイオ

ン組成と電気伝導率」であります。その事について以下に少し説明します。

窒素施用の施肥設計を立てる場合、簡易には土壌の水浸出液(1:5)の電気伝導率を測定し、硝酸態窒素の残存量を推測しています。しかし、施設等の降雨が遮断されている条件下においては、施肥による残存肥料成分が集積しやすいこととあいまって、集積した肥料塩類のうち、硫酸イオン等が土壌の水浸出液の電気伝導率を押し上げ、硝酸態窒素の推測を困難にしている場合があります。そこで、長野県下のカーネーション連作圃場より土壌を採取し、硫酸集積の実態を把握するため各種浸出液を用いて浸出を行い、その液の電気伝導度をECメーターで測定し、陰陽イオン組成をイ

オンクロマトグラフィにより定量しました。また、硝酸イオンと硫酸イオンを簡易に測定できる可能性のある方法も若干検討しました。

研修の内容については、別の機会に述べるとして今回は、つくばでの私の奮闘記を紹介します。つくばでの研修では、“ウナリ”多き、私にとって思い出深い研修でした。

長野での雑務もそこそこに、つくばでの研修のことは、とりあえず行ってから考えようと思い、関係がありそうな書類とサンプルを、車のサスペンションがペしゃんこになるほど積み込み（ほとんどが土壌サンプル）つくばに到着しました。まずやったことは、長野より持ち込んだ土壌サンプルの乾燥でした。3日あれば、土を広げて、乾燥させてフルイにかけて分析が始められると思いきや、広げるのに3日、乾燥させるのに1週間近くかかり、「うう～んん!!いつになったら研修にかかれるやら?」と、まず、ひとウナリ。

元来気の小さい私が、一挙手一投足に研修室の皆さんの視線を背中に感じながら分析に着手しました。今回の分析の主要機器のイオンクロマトに馴染もうと、溶離液を調整し、スイッチオン、ベースラインの安定を見ようとしました。ところが……。先週まで他の人が使用してなんでもなかったイオンクロマトのベースラインが……。 「うう～んん!! どうしてなんでしょうかねー?」と、また、ひとウナリ。

原因がわかり、ようやく動くようになったところで、陽イオンカラムのリテンションタイムが、短くなったからカラムのフラッシングを行おうと規定どおりの硝酸液を打ちました。フラッシングの後、標準液を打ってみたが……。 「どうもピーク



研究室のみなさんと（中央が筆者）

の分離が悪いんですねー。前にフラッシングしたときにはこんな事はなかったのにねー。」と。「うう～んん!! 困りましたね～。マニュアルどおりやったんですけどね～。うう～んん!!」と、ふたウナリ。

すったもんだがあって、イオンクロマトとも仲良くなって、原子吸光をする機会がありました。原子吸光は、長野でも使っているし難しい機器ではないからと、軽い気持ちで隣の研究室の方の説明を聞きつつ、サンプルを吸わせていると……。

「あれっ! サンプル吸ってないちゃうん?」と大阪弁で。「今までずうっと使ってきたけどこんな事一度もあれへんやったけどな?」と。「うう～んん!! またか。やんなっちゃうなあ。うう～んん!!」と、またまた、ふたウナリ。

そんなこんなで、2月半が過ぎ、いよいよ“まとめ”の時期となりました。文書仕事が苦手な自分が最も唸らなければならない日々を前に、寮で一人つぶやきました。「うう～んん!! 実に“ウナリ”多き研修になったなあ～。」と。

## 主な会議・研究会等 (6. 7～12)

- 6. 7. 5 平成6年度農業環境技術研究所運営委員会
- 6. 9. 8～9 農薬動態研究会「環境における農薬の分解と微生物の活用」(参加者170名)
- 6.10. 6～7 土・水研究会「暖地農業における養分循環の問題点と技術的展望」(参加者173名)
- 6.11.17 農業環境シンポジウム「導入・侵入生物の生態系へのインパクト」(参加者206名)
- 6.12. 2 地球環境変化・研究会「変容する地球環境と土壌資源の将来」(参加者114名)

## 研究員・研修生等（6. 5～12）

氏名	所属	種類	滞在する研究室	課題	期間
Rakwal Rendeep	茨城大学大学院 農学研究科	技術講習	薬剤耐性研究室	抗いもち剤の検定法の習得	H. 6. 5. 1 ～ 10. 31
吉田 実	岐阜大学大学院 連合農学研究科	〃	情報解析・システム 研究室	データ解析並びに画像解析方法の習得	H. 6. 5. 9 ～ 5. 27
神代大樹	北里大学 衛生学部	〃	分析法研究室	環境試料の機器分析に関する技術講習	H. 6. 5. 9 ～ H. 7. 2. 28
大橋竜也	〃	〃	〃	〃	H. 6. 5. 9 ～ H. 7. 2. 28
久米隆志	鹿児島県農業試験場	依頼研究員	土壌有機物研究室	各種有機質資材の土壌中での分解特性及び品質 評価法	H. 6. 6. 1 ～ 11. 30
斉藤泰彦	北興化学工業(株)	〃	殺菌剤動態研究室	薬剤の挙動と生物効果の関係の解析	H. 6. 6. 1 ～ 11. 30
吉岡祐一	東洋電化工業(株)	〃	除草剤動態研究室	環境中における農薬の動態制御技術の開発	H. 6. 6. 1 ～ H. 7. 2. 28
橋本良子	東京都農業試験場	〃	殺虫剤動態研究室	残留農薬分析に関わる基礎的知識	H. 6. 6. 1 ～ 8. 31
内山和子	神奈川県農業総合 研究所	〃	土壌微生物生態研究 室	土壌微生物の選択的分離	H. 6. 6. 1 ～ 11. 30
浅井貴之	長野県畜産試験場	〃	多量要素動態研究室	家畜ふん尿の肥料化技術の開発	H. 6. 6. 1 ～ 8. 31
湯谷一也	鳥取県農業試験場	〃	生物情報計測研究室	リモートセンシング手法を用いた直播栽培水稻 の生理生態的操作の解明	H. 6. 6. 1 ～ 8. 31
重富修	佐賀県農業研究 センター	〃	気候資源研究室	メッシュ気候資源の利用技術の確立	H. 6. 6. 1 ～ 11. 30
Mr. Joseph B. Rojas	フィリピン 土壌水管理 局農業研究センター	J I C A	土壌生成研究室	土壌侵食の実態と要因解析（降雨量、傾斜作付 様式）およびその防止法	H. 6. 6. 28 ～ 8. 12
富永重敏	長崎県果樹試験場	依頼研究員	土壌物理研究室	根群発達と土壌の物理性	H. 6. 7. 1 ～ 9. 30
近藤吉和	大分県農技センター	〃	生物情報計測研究室	果菜類生体情報の非破壊計測法	H. 6. 7. 1 ～ 9. 30
河村哲也	千葉大学 工学部 助教授	流動研究員	気象特性研究室	植生のCO <sub>2</sub> ガス交換流体力学系モデルの開発研 究	H. 6. 7. 1 ～ 9. 30
関上直行	群馬県農業試験場	依頼研究員	気象生態研究室	気象に関する生育予測のモデル化	H. 6. 7. 11 ～ 10. 10
五島知子	筑波大学大学院 環境科学研究科	技術講習	地球環境研究チーム	酸性雨に関する総観気候解析技術	H. 6. 7. 18 ～ H. 7. 3. 31
林浩昭	東京大学 農学部 助手	流動研究員	微量要素動態研究室	ICP-MSを用いたシロイヌナズナの体内におけ る微量元素の挙動解析	H. 6. 8. 1 ～ 8. 15
佐藤健司	宮城県農業センター	依頼研究員	土壌微生物生態研究 室	土壌微生物の検出と診断方法	H. 6. 8. 1 ～ 10. 31
村上芳照	山梨県総合農業試験場	〃	天敵生物研究室	難防除害虫の天敵を用いた防除	H. 6. 8. 1 ～ 10. 31
佐渡山安常	沖縄県農業試験場	〃	天敵生物研究室	天敵昆虫の増殖及び特性解明	H. 6. 8. 1 ～ 10. 31
木嶋伸行	熊谷組技術研究所	技術講習	土壌微生物生態研究 室	極限環境下の細菌集団構造の探索	H. 6. 8. 22 ～ H. 7. 3. 31
寺西雅弘	富山県薬事研究所 付設薬用植物指 導センター	〃	線虫・小動物研究室	シャクヤクの線虫の分類・同定法並びに線虫の 生態的防除法等	H. 6. 8. 22 ～ 8. 26
文字信貴	大阪大学 農学部 教授	流動研究員	気象特性研究室	大気微量気体の農林生態系における観測的研究	H. 6. 8. 23 ～ 9. 3

氏名	所属	種類	滞在する研究室	課題	期間
渡辺和弘	山形県園芸試験場	依頼研究員	天敵生物研究室	天敵による害虫防除	H. 6. 9. 1 ~11.30
谷川元一	奈良県農業試験場	"	殺虫剤動態研究室	薬剤の散布方法を変えた時の薬剤付着量と防除効果の関係	H. 6. 9. 1 ~11.30
山下賢一	兵庫県中央農業技術センター	"	天敵生物研究室	アブラムシ類に対する天敵利用技術の開発	H. 6. 9. 1 ~11.30
千脇健司	岡山県農業試験場	"	隔測研究室	リモートセンシング技術を利用した病害虫発生予察	H. 6. 9. 1 ~11.30
大平仁夫	鳳来寺自然科学博物館	流動研究員	昆虫分類研究室	コメツクムシ科 (Elateridae) の形態・分類学的研究	H. 6. 9. 6 ~ 9.30
竹内晴信	北海道北見農業試験場	依頼研究員	土壌物理研究室	作物に対する土壌の水分供給能の評価	H. 6. 9.26 ~12.22
植田稔宏	茨城県農業総合センター	"	"	一般的土壌物理性に係る研究成果の習得	H. 6.10. 1 ~H.7.1.31
斉藤龍司	長野県野菜花き試験場	"	多量要素動態研究室	硫酸集積土壌のイオン組成と電気伝導率	H. 6.10. 1 ~12.28
竹内徹	北海道中央農業試験場	"	寄生菌動態研究室	作物病害のDNA診断技術の開発	H. 6.10. 2 ~H.7.3.30
Ma. Arlene M. Evangelista	フィリピン 土壌水管理 リモートセンシング課	科技厅 科技振興 調整費総合 研究	隔測研究室	「マイクロ波センサデータ利用等によるリモートセンシング高度化のための基盤技術開発」において「農業環境変化モニタリングのためのリモートセンシング技術高度化共同研究」の推進	H. 6.10. 3 ~11. 1
Mr. Yulianto Baliadi	インドネシア マラン食用作物研究所 (MARIF)	国研センター 招へい	線虫・小動物研究室	植物寄生性線虫の形態学的及び生化学的分類・同定法	H. 6.10.13 ~10.23
加藤秀一	長野県果樹試験場	技術講習	多量要素動態研究室	可給態窒素測定法の習得	H. 6.10.17 ~10.28
Ms. Siriporn Zungontiporn	タイ 農業協同組合省	J I C A	他感物質研究室	雑草科学	H. 6.10.18 ~H.7.10.4
大倉利明	J I C A プロジェクト方式技術 協力に係る技術研修者	技術講習	土壌分類研究室	立地類型区分、土壌生産力可能性分級の実成技術	H. 6.10.24 ~11.18
河村哲也	千葉大学 工学部 助教授	流動研究員	気象特性研究室	植生CO <sub>2</sub> ガス交換流体力学系モデルの開発研究	H. 6.12. 1 ~H.7.1.21
林浩昭	東京大学 農学部 助手	"	微量要素動態研究室	ICP-MSを用いたシロイヌナズナの体内における微量元素の挙動解析	H. 6.12. 1 ~12.13

## 人 事 ( 6 . 8 ~ 1 1 )

### 転 入

発令年月日	氏名	新所属	旧所属
6. 8. 1	蘭道生	環境資源部長	国際農林水産業研究センター環境資源部長
6.10. 1	廣澤久子	企画調整部情報資料課課長補佐	畜産試験場企画連絡室情報資料課司書専門官
	高津武 齋藤誠	総務部庶務課庶務第2係長 総務部庶務課人事第1係長	果樹試験場総務部会計課施設管理係長 国際農林水産業研究センター総務部庶務課人事係長
	野口美千代 佐藤和彦	総務部会計課(用度係) 総務部会計課(用度係)	果樹試験場育種部 蚕糸・昆虫農業技術研究所松本支所製糸試験部(庶務係)
	山本博道	環境管理部計測情報科数理解析研究室長	食品総合研究所分析評価部主任研究官(品質情報解析研究室)
	駒田充生	環境資源部主任研究官(水質管理科水質保全研究室)	北海道農業試験場生産環境部主任研究官(水田土壌管理研究室)

発令年月日	氏名	新所属	旧所属
6.10.1	宮下清貴	環境生物部主任研究官(微生物管理科土壌微生物利用研究室)	農林水産技術会議事務局研究開発課課長補佐(開発第2班担当)
	三島慎一郎	環境管理部(資源・生態管理科資源・環境動態研究室)	東北農業試験場企画連絡室(企画科)
	上村順子	環境資源部(土壌管理科土壌有機物研究室)	北海道農業試験場企画連絡室(企画科)
	森脇丈治	環境生物部(微生物管理科微生物特性・分類研究室)	九州農業試験場企画連絡室(企画科)
	関口哲生	資材動態部(肥料動態科多量要素動態研究室)	九州農業試験場企画連絡室(企画科)

## 転出

発令年月日	氏名	新所属	旧所属
6.8.1	風野光	農業研究センター総合研究官	企画調整部長
6.10.1	陽捷行	国際農林水産業研究センター環境資源部長	環境管理部資源・生態管理科長
	平山立夫	農林水産技術会議事務局筑波事務所広報専門官	企画調整部情報資料課課長補佐
	大柿秀雄	草地試験場総務部庶務課人事第1係長	総務部庶務課人事第1係長
	大武稔	農業工学研究所総務部庶務課庶務係長	総務部会計課主計係長
	矢口直実	農林水産技術会議事務局筑波事務所管理第2課(業務係)	総務部会計課(用度係)
	高橋剛史	農業研究センター総務部会計課(主計係)	総務部会計課(用度係)
	山田一茂	北海道農業試験場農村計画部気象資源評価研究室長	環境管理部計測情報科数理解析研究室長
	石田憲治	九州農業試験場農村計画部資源評価研究室長	環境管理部主任研究官(資源・生態管理科環境立地研究室)
	遠藤勲	食品総合研究所分析評価部品質情報解析研究室長	環境管理部主任研究官(計測情報科情報解析・システム研究室)
	藤本瑞	農業生物資源研究所分子育種部(遺伝子情報管理研究室)	企画調整部(企画科)
	荒谷博	草地試験場育種部(育種化学研究室)	企画調整部(企画科)
	植原健人	北海道農業試験場生産環境部(線虫研究室)	企画調整部(企画科)
	田澤純子	北海道農業試験場畑作研究センター(環境制御研究チーム)	企画調整部(企画科)
	芦澤武人	東北農業試験場水田利用部(水田病害研究室)	企画調整部(企画科)
	安田伸子	北陸農業試験場水田利用部(病害研究室)	企画調整部(企画科)
	米村健	中国農業試験場生産環境部(気象資源研究室)	企画調整部(企画科)
	橋詰登	農業総合研究所農業構造部(地域経済研究室)	環境管理部(資源・生態管理科資源・環境動態研究室)

## 所内異動

発令年月日	氏名	新所属	旧所属
6.8.1	原田二郎	企画調整部長	環境生物部植生管理科長
	福原道一	環境管理部資源・生態管理科長	企画調整部地球環境研究チーム長
	浅川征男	環境生物部植生管理科長	環境生物部植生管理科他感物質研究室長
	袴田共之	企画調整部地球環境研究チーム長	環境管理部資源・生態管理科資源・環境動態研究室長
6.9.28 (6.4.1付)	松森堅治	環境管理部主任研究官(資源・生態管理科環境立地研究室)	環境管理部(資源・生態管理科環境立地研究室)
	井手任	環境管理部主任研究官(資源・生態管理科植生動態研究室)	環境管理部(資源・生態管理科植生動態研究室)
	山村光司	環境生物部主任研究官(昆虫管理科個体群動態研究室)	環境生物部(昆虫管理科個体群動態研究室)
	川崎晃	資材動態部主任研究官(肥料動態科廃棄物利用研究室)	資材動態部(肥料動態科廃棄物利用研究室)
6.9.28 (6.7.1付)	池田浩明	企画調整部主任研究官(地球環境研究チーム)	企画調整部(地球環境研究チーム)
6.10.1	藤原剛	総務部庶務課人事第2係長	総務部庶務課(人事第2係)
	十鳥政信	総務部会計課主計係長	総務部庶務課庶務第2係長
	新藤純子	企画調整部主任研究官(地球環境研究チーム)	環境管理部主任研究官(資源・生態管理科資源・環境動態研究室)

発令年月日	氏名	新所属	旧所属
6.10.1	網藤芳男	環境管理部主任研究官(資源・生態管理科農村景域研究室)	環境管理部(資源・生態管理科農村景域研究室)
	鈴木健	資材動態部主任研究官(農薬動態科薬剤耐性研究室)	資材動態部(農薬動態科薬剤耐性研究室)
	屋良佳緒利	環境生物部(昆虫管理科天敵生物研究室)	企画調整部(企画科)

### 育児休業

発令年月日	氏名	期間
6.8.2	小西和彦	6.8.2~6.11.6

### 職務復帰

発令年月日	氏名	所属	期間
6.11.7	小西和彦	環境生物部主任研究官	育児休業(6.8.2~6.11.6)

### 併任解除

発令年月日	氏名	併任先	本務地
6.10.1	芦澤武人 橋詰登	農業研究センター企画調整部 農業総合研究所農業構造部	企画調整部(企画科) 環境管理部(資源・生態管理科資源・環境動態研究室)

### 辞職

発令年月日	氏名	新所属	旧所属
6.8.1	久保田徹		環境資源部長

## 海外出張(6.5~12)

氏名	所属	出張先	本人の活動内容	出張期間	備考
松村雄	環境生物部	韓国	農業昆虫の分類	H6.5.19 ~6.16	JICA
根本正之	環境生物部	イギリス	英国の草地における草本群落の多様性と持続性の解明に関する研究	H6.6.1 ~7.31	ロンドン大学
尾和尚人	資材動態部	韓国	「農業生産における微生物・有機質肥料の利用に関する国際セミナー」に出席し、肥料及び土壌改良資材の専門家として発表する	H6.6.13 ~6.18	FFTC
對馬誠也	環境生物部	中国	第2回杭州国際病理学シンポジウムに出席し、発表する	H.6.6.13 ~6.24	研究交流促進法第5条
横山和成	環境生物部	〃	〃	〃	〃
松田泉	環境生物部	〃	第2回杭州国際病理学シンポジウムに出席する	H.6.6.13 ~6.21	〃
鈴木文彦	環境生物部	〃	〃	H.6.6.13 ~6.24	〃
原菌芳信	環境資源部	アメリカ	ツンドラ地域における地球温暖化ガスフラックスの観測研究	H.6.6.29 ~7.20	サンディエゴ大学
吉本真由美	環境資源部	〃	〃	H.6.6.29 ~8.15	〃
鈴木健	資材動態部	〃	第8回国際農薬化学会議に出席する	H.6.7.3 ~7.10	研究交流促進法第5条
昆野安彦	資材動態部	〃	第8回国際農薬化学会議に出席し、ポスター発表を行う	H.6.7.3 ~7.10	〃
上路雅子	資材動態部	〃	第8回国際農薬化学会議に出席する	〃	〃
高木和弘	資材動態部	〃	〃	〃	〃
結田康一	環境管理部	メキシコ アメリカ	第15回世界土壌科学会議に出席し、発表する	H.6.7.5 ~7.26	〃
浜崎忠男	環境資源部	〃	〃	〃	〃

氏名	所属	出張先	本人の活動内容	出張期間	備考
袴田 共之	環境管理部	メキシコ	第15回世界土壌科学会議に出席し、ポスター発表を行う	H. 6. 7. 6 ～ 7.18	研究交流促進法第5条
岡田 齊夫	環境研究官	オーストラリア、 フィジー、西サモア、 トンガ、ニュージーランド	オーストラリア、フィジー、西サモア、トンガ及びニュージーランド国において、果樹と根菜類の病害虫の発生、被害状況並びに作物保護上の問題点の調査	H. 6. 7.10 ～ 7.25	アジア生産性機構
陽 捷行	環境管理部	オーストラリア	IGBPの中のGCTEに関する会議において、地球温暖化と陸上生態系について討論する	H. 6. 7.10 ～ 7.15	研究交流促進法第5条
新藤 純子	環境管理部	メキシコ	第15回国際土壌科学会議に出席し、ポスター発表を行う	H. 6. 7.10 ～ 7.18	〃
岡本 勝男	企画調整部	パラグアイ	パラグアイ農牧統計強化計画に係るリモートセンシングの専門家としてその任に当たる	H. 6. 7.11 ～ 8. 8	JICA
白井 洋一	環境生物部	タイ	熱帯野菜害虫コナガの発生解析	H. 6. 7.18 ～ 8.16	国際農水研センター
吉松 慎一	環境生物部	韓国	韓国農林振興庁農業技術研究所において、農業昆虫分類の専門家として指導・助言等を行う	H. 6. 7.18 ～ 8.11	JICA
加藤 英孝	環境資源部	中国	西太平洋地球物理学会議に出席し、水文学のセッションで口頭発表及び情報収集を行う	H. 6. 7.24 ～ 7.30	研究交流促進法第5条
陽 捷行	環境管理部	〃	AGU-WPM国際会議に出席し、地球温暖化と水田のセッションで議長を務める	H. 6. 7.24 ～ 7.27	〃
鶴田 治雄	環境管理部	〃	西太平洋地球物理学会議に参加し、「水田から発生する亜酸化窒素の測定」という課題で発表する	H. 6. 7.24 ～ 7.27	〃
八木 一行	〃	〃	西太平洋地球物理学会議に参加し、大気化学のセッションで発表する	〃	〃
小原 裕三	資材動態部	〃	西太平洋地球物理学会議に参加し、大気化学のセッションで情報収集を行う	H. 6. 7.24 ～ 7.30	〃
大塚 紘雄	環境資源部	フィリピン	フィリピン土壌計画 フェーズIIに係る事前調査団	H. 6. 8.16 ～ 8.25	JICA
岩間 秀矩	環境資源部	〃	〃	〃	〃
横沢 正幸	環境資源部	イギリス	第6回国際生態学会議に参加し、討論を行う	H. 6. 8.20 ～ 8.26	研究交流促進法第5条
細野 達夫	環境資源部	〃	〃	〃	〃
池田 浩明	企画調整部	〃	〃	H. 6. 8.21 ～ 8.26	〃
白井 洋一	環境生物部	〃	研究課題「移動性昆虫の飛越行動性の解明」に係る、第6回国際生態学会に出席し、「鱗翅目昆虫の飛越と繁殖行動の関係」について発表する	H. 6. 8.20 ～ 8.28	科技厅 重点基礎
小泉 博	環境生物部	〃	第6回国際生態学会議に参加し、「日本の農業環境における炭素の動態及び収支」に関する講演を行う	H. 6. 8.21 ～ 8.26	研究交流促進法第5条
松森 堅治	環境管理部	タイ	東北タイ農業開発研究計画フェーズIIに係る地理情報システムの短期専門家	H. 6. 8.23 ～ 10.20	JICA
尾和尚人	資材動態部	インドネシア	インドネシア国農業省農業研究開発庁中央食用作物研究所において開催のセミナーで、「農業資材の有効活用」の専門家として指導助言を行う	H. 6. 8.24 ～ 9. 2	JICA
秋山 侃	環境管理部	フィンランド	北極域における気圏・水圏・生物圏の変動及びそれらの相互作用に関する国際共同研究	H. 6. 8.24 ～ 9. 4	科技厅 総合研究
原 蘭芳信	環境資源部	中国	砂漠化機構の解明に関する国際共同研究	H. 6. 8.25 ～ 9.10	〃
大黒 俊哉	環境生物部	〃	〃	H. 6. 8.25 ～ 9.14	〃
松尾 和人	環境生物部	中国	中国東部半乾燥地域における砂丘植物の耐乾性機構の解明に関する研究	H. 6. 8.25 ～ 9.14	中国科学院 沙漠研究所

氏名	所属	出張先	本人の活動内容	出張期間	備考
山崎 慎一	環境管理部	ハンガリー	第13回国際質量分析会議に出席し発表を行う	H. 6. 8.29 ～ 9. 2	研究交流促進法第5条
山崎 慎一	環境管理部	イギリス	第4回プラズマ源質量分析国際会議に出席し、講演発表を行う。さらに、マッコーレー土地利用研究所を訪問し、環境試料の微量元素分析等に関する講演並びに情報交換を行う	H. 6. 9.10 ～ 9.23	科技厅国研集会 マッコーレー土地利用研究所招へい
麓 多門	環境資源部	ポーランド	第3回国際環境地球化学シンポジウムに出席し、研究発表と討論を行う	H. 6. 9.10 ～ 9.16	茨城県科学技術振興財団 研究交流促進法第5条
越野 正義	資材動態部	台湾	FFTC (食糧肥料技術センター)の「葉及び土壌の診断による施肥」に関する研究会に講演者として参加する	H. 6. 9.12 ～ 9.17	FFTC
小川 直人	環境生物部	アメリカ	日米科学技術協力協定下にある課題「環境汚染関連有機塩素化合物の生物分解」について共同研究を実施する	H. 6. 9.26 ～10.26	科技厅 二国間協力
越野 正義	資材動態部	タイ	ESCAP品質管理及び環境保護のための肥料法令に関する地域シンポジウム出席	H. 6.10. 2 ～10. 8	農水省
吉田 睦浩	環境生物部	イギリス	DNAの相同性に基づいた昆虫病原性線虫の分子分類学的研究	H. 6.10. 3 ～11.26	国際寄生虫学研究所招へい
小林 和彦	環境資源部	タイ	タイ東北タイ農業開発計画フェーズIIに係る作物生態の短期専門家	H. 6.10. 3 ～ 11.30	JICA
清野 裕	企画調査部	韓国	韓国生態学シンポジウムに出席し、気候変化に伴う生態系への影響について発表・討議を行う	H. 6.10. 6 ～10. 7	研究交流促進法第5条
新藤 純子	環境管理部	中国	アジア酸性雨影響会議に出席する	H. 6.10. 9 ～10.15	”
矢島 正晴	環境資源部	フィリピン	フィリピン稲研究所計画に係る作物生理の短期専門家	H. 6.10.10 ～11. 5	JICA
加藤 直人	資材動態部	オーストリア	FAO/IAEA主催の「持続型農業と環境保全に関する土壌・植物研究における原子力手法に関する国際シンポジウム」において「アイソトープ手法によるリン酸肥料の植物に対する残効評価」の課題で発表する	H. 6.10.15 ～10.23	科技厅 国研集会
宮田 明	環境資源部	オーストラリア	「農林生態系における観測研究」に係る、温室効果気体のフラックスの観測手法に関する現地調査研究を実施する	H. 6.10.17 ～11. 3	科技厅地球科学技術特定調査研究
原 蘭芳信	環境資源部	チリ	「地中海型生態系における景観退化」の国際会議に出席し、発表する	H. 6.10.21 ～11. 2	研究交流促進法第5条
袴田 共之	企画調整部	アメリカ	「地球変動評価モデルの構築に関する国際ワークショップ」に出席	H. 6.10.24 ～10.30	(社)科学技術国際交流センター (JISTEC)
池田 浩明	企画調整部	台湾	「第7回IUAPPA大気汚染および廃棄物に関する環太平洋地域会議」に出席し、講演を行う	H. 6.11. 1 ～11. 4	研究交流促進法第5条
鶴田 治雄	環境管理部	タイ	「メタン・亜酸化窒素の放出源及びその放出量の解明に関する研究」の効率的推進	H. 6.11. 9 ～11.15	環境庁地球環境研究
谷山 一郎	環境資源部	中国	東アジアにおける土地荒廃防止のための土地利用システムに関する国際ワークショップの開催準備	H. 6.11.10 ～11.19	(社)科学技術国際交流センター (JISTEC)
今川 俊明	環境管理部	中国	”	”	”
山崎 慎一	環境管理部	韓国	農業用水水質管理に関する国際会議において「日本における農業用水水質管理に関する環境科学的展望」という演題で講演を行う	H. 6.11.10 ～11.13	ソウル大学 国立環境管理機器センター
岩間 秀矩	環境資源部	ブラジル	セラード農業環境保全研究計画に係る土壌物理の短期専門家	H. 6.11.11 ～12.27	JICA

氏名	所属	出張先	本人の活動内容	出張期間	備考
山川 修治	企画調整部	オーストラリア	「農林水産生態系を利用した地球環境変動要因の制御技術の開発」に関する平成6年度海外調査	H. 6.11.12 ～11.23	農水省地球環境
福原 道一	環境管理部	ブラジル	セラード農業環境保全研究計画に係るリモートセンシングの短期専門家	H. 6.11.14 ～12.4	JICA
竹澤 邦夫	企画調整部	アメリカ	ENVIRO SOFT 94 (環境の数理的把握に関する国際会議) に出席し、研究発表と討論を行う	H. 6.11.15 ～11.8	研究交流促進法第5条
八木 一行	環境管理部	タイ	湿潤熱帯農地のメタン生成メカニズムと生成抑制技術の開発	H. 6.11.17 ～12.6	国研センター
袴田 共之	企画調整部	中国	中国における酸性雨実態把握調査	H. 6.11.23 ～12.1	(社)海外環境協力センター (OECC)
吉野 嶺一	環境生物部	アルゼンチン	アルゼンチン植物ウイルス研究計画実施協議調査団	H. 6.11.24 ～12.9	JICA
松本 成夫	環境管理部	タイ	樹木伐採跡地の気候的变化の評価	H. 6.11.30 ～12.20	国研センター
浜崎 忠雄	環境資源部	タイ	「熱帯林変動とその影響」に係る課題「土壌環境の変動に関する観測研究」のための現地調査と研究打合せ	H. 6.12.4 ～12.24	科技厅地球科学技術特定調査研究
小原 洋	環境資源部	〃	〃	〃	〃
根本 正之	環境生物部	ブラジル	ブラジル北東部半乾燥地帯の種多様性の維持と植生修復に関する調査研究	H. 6.12.7 ～H.7.1.7	ジョアキンナブコ研究所
鶴田 治雄	環境管理部	中国	「メタン・亜酸化窒素の放出源及びその放出量の解明に関する研究」の効率的推進	H. 6.12.8 ～12.13	環境庁地球環境研究
鶴田 治雄	環境管理部	インドネシア	「アジア太平洋地域における土地利用変動が地球温暖化に及ぼす影響に関する予備的研究」に係る現地調査として、インドネシアにおける森林消失後の土地利用変化状況の把握	H. 6.12.20 ～12.24	環境庁地球環境研究
大塚 紘雄	環境資源部	アメリカ	「主要国の農業生産状況に関する調査」に係る米国派遣のチーム長としてその任に当たる	H. 6.12.11 ～12.23	農水省

### 国内留学 (6. 6～ 9)

氏名	所属	留学先	研究課題	出張期間	備考
麓 多門	環境資源部	東北大学 農学部	黒ボク土の陰イオン吸着性の解明	H. 6. 6. 1 ～ 8.31	農水省
網藤 芳男	環境管理部	広島大学 工学部	人の環境移行にともなう自然環境および農業生態系の認識・評価モデルの開発	H. 6. 9. 1 ～H. 7. 2.28	科技厅

### 流動研究員 (6. 10～)

氏名	所属	派遣または招へい場所	研究課題	期間	備考
吉本 真由美	環境資源部	千葉大学 工学部 情報工学科	大気-植生-土壌系モデルの農林生態系への適用	H. 6.10. 1 ～12.25	
坂西 研二	環境資源部	国際農林水産業研究センター沖縄支所	光波式距離測定装置による土壌浸食量の計測	H. 6.10.30 ～11.12	

農環研ニュース No.27 平成7年3月10日

発行 農業環境技術研究所 〒305 茨城県つくば市観音台3-1-1 電話 0298-38-8186(広報係)

印刷 (株)エリート印刷